



避難所でのミーティング



避難所での健康相談の様子



避難所の様子



後方で隊員を支えた「支援車」



被災地の様子



津山から参加した第1次隊の皆さん

災害に備えての自主防災の重要性を実感

津山圏域消防組合 中央消防署 畑 修治 救急救命士

3月11日、地震が発生した時、流れてくる映像を見ていると、出動命令がいつ下ってもおかしくない大変な状況だと即座に思いました。翌朝、緊急命令があり、津山からは救助隊員5人と救急救命士3人が県緊急消防援助隊に参加することとなりました。12日に津山を出発して、移動途中に派遣先が宮城県多賀城市に決まり、17日に帰ってくるまでの、6日間の活動でした。

被災地は、津波の影響によって家は倒壊し、がれきや車両が重なり合い、へどろに埋もれていました。そのような惨状にただただ驚くばかりでした。

わたしたちは、救助隊が発見した被災者を病院へ搬送する役割でした。本来、救急車は人の命を救うためのものです。しかし、今回わたしたちが搬送できたのは、既に死亡した人ばかりで、本当に胸が痛みました。その後、避難所の患者を搬送するよう要請があり、その活動にあたりました。停電によって電話が使えない状態だったので、避難所との連絡は、連絡員を通さなければならず、とても不便でした。さらに、患者を直接病院へ搬送しても、玄関先で病院側と受け入れが可能かどうか交渉しなければならず大変でした。

溜まっているように感じた。わたしたちの活動は短い期間だったので、きめ細かな支援ができなかったことに、くやしさを感じています。

また、産気付いた妊婦を搬送したことがありました。津山に帰ってのち、「無事に出産できました」とお礼の手紙が届き、改めてこの仕事の重責と誇りを感じることができました。

震災を受けて、今、わたしたちができることは、より節制した生活を送ることだと感じました。普段から、ちよつとしたことでもいいので、節制を心がけましょう。

今回の活動では、初めて「支援車」という災害現場でのわたしたちの活動を後方から支える車両が出動しました。このことで、活動に必要な資機材を、より多く持つていくことができました。わたしたちの任務を支えてくれる頼もしい装備です。今後、長期的な活動が必要な時に、その拠点になると思っています。

被災地の状況を目の当たりにして改めて、

津山でも自主防災の組織づくりをして、普段から災害に備えるということが大切だと思いました。町内会や消防団を中心として避難訓練などを行い、いざ災害が起きた時、どこに避難するか、どうやって助け合うか、地域ぐるみで考えて、防災の意識を高めていくことが大切です。家や町内、小学校単位などで訓練を行い、普段から地域の危険箇所を知り、地域の人の輪を広げることが必要です。

地域をつなぐ絆が大事

健康増進課 佐々木宣江 保健師(右)

障害福祉課 杉井 真澄 保健師(左)

わたしたちは、岩手県大船渡市の避難所で、健康相談を中心とした保健業務の支援に携わりました。

避難所では、血圧測定や服薬の状況の聞き取り、ストレスの状態確認を含めた健康相談などを行い、状況によっては、医師への受診を勧めたり、医療チームなどへつなぎました。

避難所の環境もさまざまで、空箱で高い壁を作ったり、テントでプライバシーを保護している避難所もあれば、低い仕切りだけでプライバシーのない避難所もありました。先の見えない避難所生活に疲れ果てている人も多く見られ、1日中寝ている高齢者もいたので「体を動かしましょう」「日光浴しましょう」という声掛けも大切な活動でした。中には「話を聞いてもらうだけでも、気が晴れたわ」と言う人もいて、うれしかったです。

活動期間中にも、余震は何度もありました。現地の職員から「いざという時は、誰かを助けようと思わず、まずは、自分で自分の身を守るように」と指導され、他人を助けないという気持ちがあっても、ひとりできることの限界と無力さを感じました。長い避難所生活の中で、徐々に、被災者同士が声を掛け合う関係になり、掃除や炊

事などを分担して行う、一つのコミュニティが生まれてきていました。

その後、仮設住宅の建設が進むにつれて、早く避難所を出て、仮設住宅に住みたいという気持ちが出てくる反面、知り合いのいない所に移るかもしれない不安を感じる人も出てきているようでした。また、入居できても、生活環境が大きく変わります。避難所と違った静かな環境に寂しさを感じ、引きこもるような症状が出るという、新たな問題が生じているようでした。

避難所でも仮設住宅でも、心のつながりを持つことが必要だと強く感じ、そのために、声掛けから始まるコミュニケーションづくりが大切だと思いました。お互いに「変わったことはありますか、お手伝いが必要なか」などと声を掛け合うことが大切だと思います。

「津波が来たときに、近所の人の声掛けのおかげで、津波から逃れることができた」と語る人がいて、ここでの地域のつなが

りに感じました。

今回の活動を通して、わたしたちも普段から災害を想定した備えをしておくことと、いざという時、近所の人と声を掛け合える関係を作っておくことが大切だと思いました。安全、安心な地域づくりには、地域をつなぐ絆が大事だと感じます。

